

日本に帰還しなかった兵士たち

—映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て自作映画を考える—

松林 要樹

日本に帰らず、タイ・ビルマ国境に残り続けた6名の元日本兵を追った「花と兵隊」という記録映画を、私は約3年かけて作った。異国での戦後をどう生きたのかということを描いた。2009年8月より全国公開され、現在いろいろな場所で自主上映会を開いていただいている。今回、映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見せていただいた。戦後60年以上の時間が流れ、私が制作した映画「花と兵隊」同様、証言者は高齢化し、次々と鬼籍に入っている、時間との勝負なのである。

取材前、私は現地で未帰還兵というのは、現地の人にどんなに忌み嫌われ、貧しい生活をしているのだろうか、そう思っていたのだが、的外れだった。今回、私が取材できた方に限った話だが、戦後、現地の人々に打ち解けて尊敬されていかなければ、生き残れなかったのだ。

私は坂井勇という方に特にお世話になった。彼を例に挙げたい。彼はタイ・ビルマ国境のメーソトという町で3万坪もの土地を持ち、暮らしていた。そこには、ビルマから迫害された60名の難民に土地を与えていた。彼らも坂井の暮らしを支えていた。彼を支えている地域の人たちの顔に、かつての日本兵を恨んでいるという感じは全くなかった。侵略者であった日本兵に対する感情が、なぜ変化したのかと疑問を持った。

坂井勇は、大正6年ブラジル・サンパウロ郊外にて生まれた。彼の両親は、福井で事業に失敗し、ひと旗挙げようと移民した。ブラジルでは、彼の両親は大変苦勞した。彼が22歳の時に、両親はブラジルで事業に失敗し、日本に帰国した。太平洋開戦前に帰国し、徴兵検査を受けた。彼はポルトガル語ができるが、日本語はほとんどできない。国籍が日本のままだったため、彼は兵隊にとられ、“ブラジル生まれの日本兵”になった。ブラジルの農園で自動車の運転をしていたので、自動車部隊に送り込まれた。当時、自動車の運転は特殊技能であったからだ。マレー・シンガポール作戦を経験し、悪名高いインパール作戦に送り込まれた。作戦中、補給がなかったので、武器もなく、食いものがなかった。彼はビルマで地獄を見た。終戦をビルマのタトンで迎え、収容所を抜け出した。

終戦まで、土地を踏み荒らしていた日本兵だ。彼らが容易にその村に受け入れられたわけではない。武器を持たず収容所から逃げ出した兵卒は、太平洋戦争後、アジア各地で盛り上がる民族独立運動や、復興事業の中に組み込まれていったのだ。坂井も独立運動に組み込まれた。無国籍の状態で異郷の土地に生きるためには、その土地に貢献しなければなら

らなかった。彼は、車の修理の技術や運転の技術など提供した。終戦時、坂井の場合は判り易く帰る場所は、ブラジルでもなく、日本でもない。居場所がどこにもなかった。坂井が帰らないと決意したのは、敗戦の大きなトラウマだった。しかし、残り続けたのは、現地で迎えた家族がいたからだったと私は思う。

映画のタイトル「花と兵隊」という花の部分は現地で迎えた家族のことを指す。武器を捨て、土地の人々のために尽くしたことによって、彼は居場所を得たのだ。戦後、彼はメーソットの土地に田畑を作り、精米所を作った。戦時中の日本の非礼を詫びるように、地域の農業発展ため、家族のため、彼は活躍して行ったのだ。そして、地域に人々に尊敬されるようになった。

逃亡兵であったため坂井は無国籍であったが、戦後13年たち、坂井は国籍を再取得し、再び、日本人になった。ブラジルで生まれたが、「私の心は日本人だ」と訴えていた。

坂井がなくなった後も、正月に餅を供え、餅とエビの入った雑煮を作り続けていた。取材中、坂井に感激したのは、日本では1年足らずしか過ごしていない彼が、日本の文化を守り続けている姿だった。

現在、日本では少なからず、中国のことをネット上で声高に罵ったうえで勇ましく「愛国心」を訴える人々がいる。彼らの意見は、なにか空虚でもの悲しい。祖国にあこがれ続けた坂井勇が持ち続けた”日本人であること”の意味をこれからも私は、考え続けたいと思っている。

(まつばやし・ようじゅ：映画監督。1979年福岡県生まれ。2004年、日本映画学校卒業。05年、アフガニスタン、インドネシア、アチェなどの映像取材に従事。09年、記録映画『花と兵隊』を監督。同作品は第1回田原総一郎ノンフィクション賞 奨励賞を受賞)